

# ■ 2026年度 入試問題分析シート ■

大阪大学

前期日程

科目

生物

総括

難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

## 〈総論〉

主に、阪大入試における頻出単元である遺伝子、免疫、ホルモンからの出題であった。〔4〕が難解であったが、それ以外の3つの大問は解きやすく、対応できた受験生が多かったであろう。また、例年に比べ論述量がかなり減少したため、しっかりと得点を積み重ねる必要がある。

## 〈特記事項・トピックス〉

論述量が減少し、選択問題が増えた。選択問題では、解答として幾つの選択肢を答えるのかの指示があった。

- 〔1〕 阪大の坂口志文博士が発見し、2025年にノーベル医学・生理学賞を受賞した制御性T細胞に関して出題であった。また、制御性T細胞が関係する出題は2019年にもみられる。
- 〔2〕 阪大入試頻出の情報伝達に関する出題であった。
- 〔3〕 2005年に出版された破骨細胞と骨芽細胞に類似する出題であった。
- 〔4〕 近年出題が増えているゲノム編集に関する思考系の良問であった。

## 〈合格への学習対策〉

例年、難問や解きにくい設問が含まれるが、その一方で標準的な設問やリード文を要約するだけの設問も出題され、そこでしっかり得点することが大切である。また、今年度のように、データを総括して読み取る読解問題が出題されやすいので、メモしながら段階的に捉え、思考過程の入った文章作成の練習をしておこう。頻出単元である免疫・神経・体液・遺伝子が苦手な受験生は克服しておくこと。

## 設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
〔1〕	記述 選択 論述	生物基礎	免疫 アレルギー 体液性免疫 制御性T細胞	【B】 C群のマウスでは、タンパク質Xの事前経口投与により、タンパク質Xに特異的な制御性T細胞が分化誘導され、T細胞集団の増殖が抑えられている。	標準
〔2〕	記述 選択 論述	生物	植物ホルモン 側芽の成長の調節 遺伝子 一遺伝子一酵素説	表2で、野生型の台木+変異体cの穂木の結果より、穂木側で合成された植物ホルモンXが側芽の成長抑制に必要であることがわかる。また、変異体aの台木+野生型の穂木の結果より、台木で合成された中間体1が台木へ移動して利用されることがわかる。あとは同様に思考する。	標準
〔3〕	記述 選択 論述	生物基礎 生物	ホルモン パラトルモン による骨破壊の調節	パラトルモンの受容体は骨芽細胞にあるが、破骨細胞と骨芽細胞が接触する場合には、破骨細胞により骨破壊が促進される。つまり、パラトルモンは、間接的に破骨細胞を刺激している。	標準
〔4〕	記述 選択 論述 計算	生物	遺伝子 ゲノム編集 電気泳動 遺伝子突然変異	問2 $6 \times 10^9 / 4^{20}$ を計算する。 【実験1】 500塩基対以上の大きな欠失があると、P1、P2で増幅されず、P3、P4で増幅した場合には2000塩基対より小さい位置にDNAのバンドが出現する。	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。